

「地域学校協働活動」の推進に向けて

県教育庁教育振興部生涯学習課学校・家庭・地域連携室

1 はじめに

地域における教育力の低下や家庭の孤立化が問題となる中、学校を取り巻く問題も複雑化・困難化しており、社会総掛かりで子どもを育てるため、地域と学校がパートナーとして連携・協働する仕組みづくりが必要となっている。

平成27年12月、中央教育審議会の「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について（答申）」において、「地域学校協働活動の推進」が提言され、29年3月の社会教育法の改正により、体制整備や地域学校協働活動推進員の委嘱に関する規定が整備され、推進に向けた基盤が整えられた。

2 「地域学校協働活動」の推進

「地域学校協働活動」とは、地域の高齢者や保護者、NPO、民間企業、団体等の幅広い地域住民の参画を得て、地域全体で子どもたちの学びや成長を支えるとともに、学校を核とした地域づくりを目指して、地域と学校が相互にパートナーとして連携・協働して行う様々な活動である。

「地域学校協働活動」を推進する主体である「地域学校協働本部」には、地域と学校をつなぐ地域学校協働活動推進員やコーディネーターが中心となり、これまでの放課後子ども教室や学校支地域本部等、個々の活動を有機的に連携させ、総合化・ネットワーク化を図り、活動を発展させていくことが期待されている。

具体的な活動としては、これまで学校支地域本部等で実施されてきた学習補助や部活動等の支援、登下校の見守り等の他に、

学びによるまちづくり、地域課題解決学習、郷土学習等、それぞれの地域にあった特色・魅力ある様々な活動も想定される。

文部科学省の調査では、「地域学校協働活動」により、「子どもたちのコミュニケーション能力が向上し、地域への理解・関心も深まった」「教職員が授業や生徒指導などにより力を注ぐことができた」との成果が示されている。

3 社会に開かれた教育課程の実現に向けて

新学習指導要領が重視する「社会に開かれた教育課程」の実現には、地域の人的・物的資源の活用を図り、学校教育を学校内に閉じず、その目指すところを社会と共有・連携していくことが求められる。そのためには、学校が地域との連携・協働を一層進めていくことが重要である。

4 おわりに

県教育委員会では、「地域学校協働活動」に関する研修の充実や意義や成果の周知を図り、推進していきたいと考えている。



中学生を対象に地域住民が講師となって実施された自然観察会（「地域学校協働活動」の例）

県立美術館 Art Collection + 「追悼 深沢幸雄の歩み」紹介

県立美術館

千葉県立美術館では千葉県ゆかりの作家や作品を中心に、約2,800点の作品を収蔵しています。これらの収蔵作品は“Art Collection”として、季節ごとに様々なテーマを設けて順次公開しています。また、“Art Collection +”として、収蔵作品以外の作品も加えた展示を年に数回企画しています。

ここでは今年1月に逝去された日本を代表する銅版画家深沢幸雄の業績を、当館収蔵の銅版画作品のほか、市原市およびご遺族からお借りした作品や資料でたどる Art Collection +「追悼 深沢幸雄の歩み」展(10月28日〈土〉～平成30年1月14日〈日〉)を紹介します。

深沢幸雄は大正13(1924)年に山梨県中巨摩郡平林村(現 南巨摩郡富士川町平林)に生まれました。

東京美術学校工芸科彫金部卒業の翌年、昭和25(1950)年に千葉縣市原市に移り住み、自宅兼アトリエで銅版画をはじめとする作品を制作し続けました。千葉県立市原高等学校の美術教師に就き、初めは油彩画を制作していましたが、東京大空襲で右ひざに受けた傷がもとで油彩の大作を制作するのが困難となり、昭和29(1954)年頃から、駒井哲郎や浜田知明といった作家の先駆的な技術を駆使した銅版画に魅せられ、独学で銅版画の制作を始めました。以後、独自の技法を開拓し、日本版画協会展、現代日本美術展、フィレンツェ国際版画ビエンナーレなど国内外の展覧会に出品して数多くの受賞を重ねました。

本展では、当館収蔵作品から約50点を精選し、銅版画の変遷をダンテの「神曲」<地獄編>などを題材とした作品などの1期(1951～1962年頃)：情念の時代<モノクローム作品制作>、メキシコのマヤ・アステカの古代文明に出会った2期(1963～

1979年頃)：再発見の時代<カラー作品制作>、身近な人間の哀愁を描いた3期(1980年以降)：挑戦の時代<メゾチントを中心とする円熟期の銅版画やガラス絵などの多芸作品制作>に分けて紹介します。

市原市所蔵のガラス絵、^{しよい}書入りパステル画や、後期のメゾチントの大作制作に大きな役割を果たした電動式ベルソー(自動目立て機)、そして自宅アトリエに残された工具類などの制作道具なども併せて展示します。

飽くなき表現の探求により、独自に開拓した多彩な銅版画の技法を駆使し、「生命の根源」をテーマに制作し続けた深沢幸雄の歩みを振り返ります。



深沢幸雄「星の門」

県立関宿城博物館における子ども向けの試み

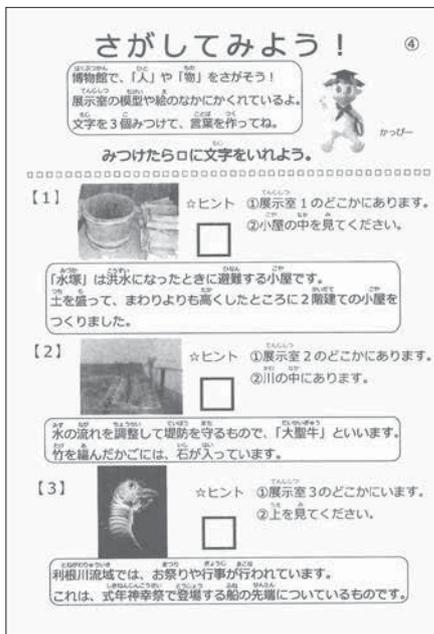
県立関宿城博物館

県立関宿城博物館は利根川と江戸川に挟まれた千葉県の最北端にあり、「河川とそれにかかわる産業と文化・関宿藩と関宿」をテーマにした歴史系の博物館です。当館は自然豊かな環境と、興味をそそられるお城型の施設のため、日曜や祝日には家族連れも多く訪れます。しかし、小さな子どもたちにとっては、当館の展示内容は、理解をすることが難しいと言わざるを得ません。専門性の高い展示を子どもたちにいか楽しく学んでもらうかは、常に課題です。

ここでは、子供たちの理解を助ける目的で実施している取組について、いくつか紹介します。

1 ワークシート「さがしてみよう」「探検クイズ」と子ども向け解説

「さがしてみよう」は展示資料を探すワークシートで、シート内にまめ知識が入っています。「探検クイズ」は、クイズに出されている展示を探し、答えを解いていくものです。展示には、子ども向け解説をつけてあるため、容易に解答でき、展示が理解できるようになっています。



2 小学校低学年および幼児向けプログラム

小学校低学年や幼児に対しては、来館記念スタンプの用紙に文字を5つ入れるゲームがあります。館内に答えの文字が散りばめてあり、探して記入するとその季節に応じた言葉になります。

また、展示模型の中にトンボや魚などの小さな生き物が作られていて、その生き物を探す「見つけてみよう」というワークシートも用意しています。大人も一緒になって生き物を探す光景が見られます。

その他、レバーを操作しながらゲームをする「川下りゲーム」や、企画展示に応じたぬりえが楽しめる「ぬりえチラシ」なども用意してあります。展示内容がわからなくても、楽しい思い出を作り、博物館に興味を持つきっかけ作りを目指しています。

3 歴史学習の展示

ワークシート等以外に、歴史学習を楽しんでもらうための教育普及的なトピックス展示も実施してきました。これらは日本の歴史に興味を持ってもらうことを目的にしています。

(1) 「くずし字に親しもう」

「さくら」、「せきやどじょう」などのひらがなのくずし字の問題を掲示し、問題をめくると解答が見られるクイズ形式になっています。「ひらがなの元になった漢字」は小学校の国語の時間に学習するため、子どもたちはくずし字に親しみました。



(2)「関宿藩すごろクイズ」

双六仕立てで楽しみながら、江戸時代のできごとと関宿藩についてクイズやパネルで学んでもらいました。展示室の壁面にクイズ等を張り出し、床の双六マスとサイコロを使って上がりを目指しました。



4 せきはく夏休み宿題プログラム

今年度は、宿題も兼ねて博物館を楽しんでもらうために、新たに2つのプログラムを始めました。夏休み期間中、平日でも多くの参加者があり、好評を博しました。今後、夏休みの子どもの入館者増加を見越し、このプログラムにプラスした新たなプログラムの開発の必要性を感じます。

(1)高瀬船たかせぶねをスケッチしよう

第3展示室には、実物の1/3の高瀬船の模型があります。江戸時代の利根川舟運の花形である高瀬船のスケッチを通して、かつてはたくさんの荷物を陸路ではなく船で運んでいたことを理解してもらうこと目的にしました。画用紙とわかったことを書き留める用紙をセットにし、鉛筆と色鉛筆でスケッチします。また、川の船「高瀬船」と海の船「五大力船ごたりのせん」の小型模型を展示してあり、それぞれを比較できるようにしました。

(2)川に関する社会科の質問コーナー

川に関する社会科の質問に答えることによって、川に関する深い知識を得てもらうことを目的に実施しました。

5 ワークショップ

これ以外に、家族連れが多く入館する日には、随時ワークショップを実施しました。5月の連休中に、「兜をかぶってハイ、ポーズ!!」、年末年始に、「消しゴムスタンプでぼち袋をつくろう!」など、日本の伝統行事や郷土に対する愛情を育むことを目的に、10分ほどの体験にしました。

6 新たなるプログラムの作成に向けて

当館では、展示を理解することが難しい幼児や小学校低学年向けのプログラムと、簡単な解説を通して展示を理解するための2つにプログラムを分けています。子ども向けの解説や歴史学習の展示は、専門的な知識をかみくだいて説明しているの、大人が理解を深めてもらう上でも有効です。観光で気軽に立ち寄った来館者にとって、当館を楽しみながら学ぶ大切なツールの一つです。

これらは、家族連れの多くなる春休みや夏休み、日曜日・祝祭日に実施日を設定しました。しかし今後は、常設展の流れに沿って、家族そろって楽しみながら理解が深まるような通年で参加できる新たなる試みを実施したいと考えています。より身近になり、進歩し続ける県立関宿城博物館にぜひ、足をお運びください。



◆問合せ先◆

県立関宿城博物館 学芸課
04-7196-1400

体験活動を取り入れた科学技術教育に関する研修について

県総合教育センターカリキュラム開発部科学技術教育担当

1 はじめに

県総合教育センターでは、学習指導要領を踏まえ、観察・実験、実習等、体験中心の内容で科学技術教育に関する研修を実施している。また大学や博物館、企業等、人的、物的資源を効果的に取り入れた研修内容も行っている。その中の一部を紹介する。

2 実施内容

(1)家庭、技術・家庭科、産業教育に関する研修

技術・家庭科には、新学習指導要領の目標に記載されているように、生活や技術に関する実践的・体験的な活動を通して資質・能力の育成を目指す教科の特性がある。指導者は、児童生徒が学習するにあたり、安全に十分配慮する必要があるだけでなく、指導者自身の技能向上、指導方法の改善を図るためにも体験活動を取り入れた研修が重要である。

①「すぐに役に立つ小学校家庭科実践研修」

本研修は、小学校初期層や家庭科の指導に不安を感じる教員を対象としている。「日常の食事と調理の基礎」では、「ジャーマンポテト、三色炒め」をエコの視点も取り入れて調理した。包丁の持ち方から片付けまで、すぐに授業で活用できる内容であった。

「生活に役立つものの製作」ではナップザックを製作した。裁縫道具の購入の際の留意点や必要なもの、製作材料についても詳細に学んだ。

また、男性教員の参加が年々増加しており、今後も積極的に参加してほしい。

②「小学校家庭科、中学校技術・家庭科研修」

技術分野では3領域を融合した開発教材「蚕の繭を利用した、天然シルクのおんどん製作・糸とり機の製作」を実施した。これは飼育した蚕の繭から絹糸をとりランプシェードに利用するものである。グループごとに、工夫をこらした絹糸の糸取り機を製作した。

小学校家庭科、中学校家庭分野では、ともに「防災教育を取り入れた家庭科教育(調理実習)」を午前中に行い、安全に関する講話の後、被災時に実践できる調理実習を行った。午後の小学校家庭科では「子どもたちの力を伸ばすお掃除セミナー」を、中学校家庭分野では「住まいと環境」を実施した。グループごとに、対話を深め、工夫した取組がみられた。

③「産業教育(高等学校家庭科、工業科)研修」

家庭科研修では、「衣生活の文化と製作」において「2日で仕上げる女物ひとえ長着(浴衣)の製作」を行った。ミシンを使用することで、専門的な知識を確認しながら、浴衣を仕上げた。

工業科研修では、「Linux-OS(Raspbian)の基本操作」「Office 互換ソフト・数式処理ソフトの活用方法」「Raspberry PiによるGPIO制御」等を行った。研修生は授業での活用方法を考えながらプログラミングに取り組んでいた。

(2)理科に関する研修

①「小学校理科楽しい観察・実験研修」

本研修では、指導に不安を感じる教員が多い地学分野について観察、実験、実習を

行った。実際に雲を作ってみたり、校庭の砂を手製ふるいで粒度によって分けたりした。また、プラスチックボトルを使ってモデル実験を行った後、水槽堆積実験器で実際の河口付近の現象に近い堆積の様子を観察した。身近にあるものを利用し、簡単にできる実験器具の製作をすることで、より効果的な授業の方法を学んだ。

②「授業に役立つ生物実験実践研修」

本研修は、生徒の興味関心を高め、理解を深めることを目的に、生物分野について具体的な実験・実習を行うものである。

本年度は、生物を専門としている高等学校教員2名を講師に、「ブタの目の解剖」「だ液の働きに関する実験」「ミジンコの形態観察」「ミジンコの血球の観察と拍動数の測定」を実施した。

ブタの目の解剖では、意外に強膜が堅く、眼科用のハサミの先端が刺さらず苦勞する研修生が見られた。チン小帯が水晶体を輪のように取り巻いている様子や視神経を観察することができ、教科書の図ではわからない細かい構造を理解することができた。また、だ液に関する実験では、講師が長期研修生の時に開発した手軽に行える実験方法についての指導があり、「すぐに取り組みてみたい」との声が多く聞かれた。ミジンコの観察では、心臓や脳、単眼等、気をつけて見ないと見逃してしまう構造については、観察の視点を示し、図と対比しながら観察することが必要であることを学んだ。また、拍動数の測定は、2人1組で行い、カウンターを利用したり、紙に点を打って数えたりするなど、協力して実験を進める体験をした。さらに、血球の観察を通し、開放血管系に関する学習も行うことができた。

理科を専門としていても、全ての領域に精通している教員は少ない。このような研修を通して、教材研究の大切さや実際に観



図1 ブタの目の解剖の様子



図2 ミジンコの観察の様子

察・実験をすることの必要性を理解し、生徒の理科に対する興味関心を高める授業づくりに積極的に取り組む教員の育成を目指したい。

3 来年度以降に向けて

平成29年度県総合教育センター科学技術教育担当が実施した理科及び環境教育関係の研修は25コース、家庭及び技術・家庭科(推薦研修を含む)と産業教育関係は10コースであった。研修後アンケートでの「今後の指導に活用できる内容であった」は、ほとんどが肯定的な回答であった。今後も児童生徒の学力向上のため、教職員の資質・能力の向上のために「役に立つ研修」を実施していく。

また、新学習指導要領が小学校は平成32年度に、中学校は平成33年度に全面実施されるにあたり、先生方のニーズに合わせた研修内容を取り入れ、積極的に活用される教育センターを目指したい。